

ハイスクールD×D 八 俣遠呂智を宿す少年

グリフィン・冬

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

昔から我々が住む日本は島国にでもあり数々の国名があつた。邪馬台国、倭国、日本、大日本帝国、そして今は日本国である。その日本には我々が敬う天皇家のご先祖様である天照大神様がいらっしゃる日本神話体系が存在する。そんな日本神話に所属するのが日本神話の話に登場する巨大な胴体に頭と尾がそれぞれ八ずつついていて天照大神の弟である須佐之男尊に倒された^{ヴェノム・ブラッド・ドラゴン}靈妙を喰らう狂龍である八俣遠呂智を宿す少年それが兵藤一誠である。

一誠には暗い過去がある。そんな一誠は自分が所属する日本神話体系の長であり両

親の代わりをしてある天照と二人の師匠から三大勢力の監視を頼まれた一誠は自身の過去と関係がある三大勢力の一角の悪魔陣営がいる駒王学園に入学する。

すいません、タイトルと話の内容を変更しました。

目次

第一章： 八俣遠呂智を宿す少年と旧校舎の悪魔達

プロローグ

1

第一章： 八俣遠呂智を宿す少年と旧校舎の悪魔達 プロローグ

皆さん初めまして僕は、兵藤一誠——それが僕の名前です。

学校の人達に僕の事を普通に一誠と呼ばれている。両親はある事情で僕の目の前で殺されて居ません。

それでも、普通に青春を謳歌している高校二年生である。

えつーと、普通に青春を謳歌していると言うのは嘘です……逆に僕はある任務をしている。その任務とは此処駒王町にいる悪魔陣営の監視をする事です。何故そんな事をしているのかと言うと僕が所属する日本神話の長であり両親の代わりをしている天照大神様と師匠の須佐之男尊様と建御雷之男神様に頼まれたのもあるし僕の私情もあるから監視をしている。

「おい、主よ誰一誠に話をしているんだ？」

「あれ？珍しいね八やつあんがいきなり話かけてくるなんて」

「ああ、主がいきなり誰かに向かつて喋っていたから僕は主の頭が可笑しくなったのか
と思つてな……」

そう言つて僕に話し掛けてきたのは、小さい時に幼馴染みの女の子の家に遊びに行つてそこにあつた日本刀みたいな物？に触つた夜に眠つて夢で巨大な胴体に八の頭と尾を持つ八つあん事霊妙ヴェノム・ブラッド・ドラゴンを喰らう狂龍である八俣遠呂智と初めてあつた。では少し昔の話をしましよう。最初は僕の中にこんな大きな怪物が居るなんて信じられなくて八つあんが夢に出てきても無視をしていたけど……何回も僕の夢に出てきてやつと僕は八つあんの存在を認めて八つあんの話を聞く事にした。

僕には何故か八つあん曰く理由が分からないが神器と呼ばれる物に八つあんが封印されていてしかもそれが神器の中でも神を葬る事ができる神滅具とか言う神器にされていってしかも世界には悪魔、墮天使、天使、ドラゴン、他神教勢力などがいる事や昔悪魔、墮天使、天使が太古に『地獄』冥界の覇権を巡つて三すくみの争いをしてる時に二天龍と呼ばれる赤き龍こと赤龍帝ドライグと永遠のライバル白い龍こと白龍皇アルピオンが、大規模な喧嘩をしながらその三すくみの争いに途中参戦して四代魔王と聖書の神様が自分達の命を引き換えに二天龍のドライグとアルピオンを何とか倒し聖書の神様によつて自分達の力と魂を神器にされて今まで神器を宿した歴代の人達はこのドライ

グとアルビオンの理由も忘れた喧嘩のせいで自分達もそのアホな争いをずっと続いて赤龍帝と白龍皇らは、今もその馬鹿らしい争いをしてる事を知った時は何とか気絶をしないままでは良いが物凄く頭痛がしたのを覚えている。そりゃあ、僕には二天龍よりも強い怪物を宿しているんだもしかしたら今代の赤龍帝や今代の白龍皇の奴等が強い力の感じて僕をどちらか二天龍と勘違いして襲ってこないとは限らないので僕は自分の安定の未来の為に修業をする事にした。

どんな修業したかは、取り合えず始めは八つあんの力を使える用に八つあんの力の能力を知ることにした八つあん曰く自分の能力は名前の通り八つあると言う。一つめが五秒で自身の力と速さと耐久力、魔力、幸運力、神力を三倍にする事ができる。二つめが自身の尾から出た天叢雲剣あめのむらくものつるぎつまり高天原にある草薙剣を代償無しで使える。三つめが自然を自由自在に操れる。残りの五つの能力は今の僕には使えないから八つあんが教えてくれなかった。とりあえず、八つあんの能力を使える用に修業する為に僕は朝起きて両親と一緒に朝食を食べてから修業する為に人目が付かないである山で修業をする事にした。

「で、八つあん最初の修業は何するの?」

「そうだな、僕の能力に耐えられるようにする為に先ずは体力を付けるために山の周り

を走る。」

「体力を付けるって言うけど、そんなに必要なの？」

僕はそう八っあんに質問すると八っあんが

「当たり前だ!! 儂の能力は体力が無ければ直ぐに能力解けるし身体が耐えられなくて主は死ぬことになるぞ。それでも良いのか?」

八っあんにそう言われて僕は、体力を付ける為に一生懸命山の周りを走りまくった。それも半年間も……………

「よし、もう主の身体に儂の能力を使っても3時間は耐えられるようになったと思うぞ。」

「はあーまだ3時間しか耐えられないのか…………」

「まあ、まだ修業して半年間しか経ってないからな。仕方あるまい」
「仕方ないか」

とりあえず僕は今日の修業は此処までにした。理由は今日は僕の9歳の誕生日だからお母さんが早く帰って来てね。後お父さんも早く帰って来ると言っていたからだ。

「それにしてもどんなに馳走を作っているかな、お母さん♪」

僕は、ルンルン気分で自宅近くまで来るととつてもなく嫌な予感を覚えて急いで僕

は家に向かった。僕は家の玄関を開け居間に向かうとそこには血を大量に流している背中から光の槍が突き刺さっている変わり果てた両親と光の槍を刺している鳥の様な黒い翼を生やした女が立っていた。

「あら？ やつと神器保持者が帰って来たわ♪」

「何なんだ、アンタは!!」

「あら？ 見て分からないのかしら。私は墮天使であなたの神器を回収する為に暇潰しにあなたの両親を光の槍で刺し殺したのよ」

は？ この女墮天使はナンテイツタンダ、ヒマツブシデボクノリョウシンヲヒカリノヤリデサシコロシタツテ？

「……………けんな!!」

「え？ 何だつて。聞こえ…………ぐふえっ!?」

「ふざけんなつて言つたんだよ!!」

僕は一瞬にして八つあんの能力一つめの能力を瞬時に倍加し女墮天使の腹部に倍加した拳が貫き腹部から血に濡れた拳を引き抜くと女墮天使は光輝き消えた。

「ハアハアハアハア……………ああああああ、あ、あ。」

僕は何とか息を整えて改めて両親の方を見て、声を上げて両親の死の現実を改めて思い知った。どのくらい時間が経ったのか分からないが両親が死んだ事には変わりもない事を理解して僕はこれからどうしようかと考えていたら窓の外から何か優しい淡い光が僕の家に降りてきてその淡い優しい光は人型に変わり僕はそれを見て窓を開けて外に出て淡い優しい光をした人型の方に向かった。

〔主よ、気を付けろ。ソイツは儂を封印した須佐之男尊の姉である天照大御神だ!〕
「えっ?」

『お久しぶりですね、遠呂智』

〔ああ久しぶりだな、天照大御神よ。何しに来た、まさかまた儂に何かする気か!〕

八つあんのその言葉を聞いて僕は身構えた。

『そんなに身構えないで下さい。あなた方に何もしません、寧ろ私は話をしたいと思つてあなたの方の所に来たのですが……………』

〔主の両親の事か〕

八つあんが天照大御神様にそう言った。

『ええ、本来ならこの様な事が起きない様に私が貴方を遠鏡えんきょうの術で見張っているのですが、京都にて妖怪の大將で九尾の狐である八坂と会談を行っていてその時に貴方方の

家に貴方が倒した女墮天使が作った結界が貴方の家を覆ったのをすぐに察知し八坂に
会谈中止の説明をしてすぐに貴方の家に向かったのですが……」

〔間に合わなかったと……〕

『……言い訳するつもりもありませんが、私の代わりに須佐之男尊か建御雷之男神に頼
んで密かに護衛させとけば貴方の両親は死なずに貴方の誕生日をお祝いする事ができ
た筈……この事は私の一生の恥です!!?』

天照様は、そう僕にそう言い僕にある提案をした。

『本来ならこれは私の罪滅ぼしだと言うことは分かっていますが一誠君、高天原に来ま
せんか?』

いきなりの天照様からの提案に僕はびっくりした。

「何故ですか、いくら天照様が罪滅ぼしの為だからと言って人間の僕を高天原に来ない
か何て……」

〔そうだ、主に罪滅ぼしする為だけに高天原に来ないかと一体何を企んでいるつもりだ
天照大御神!!?〕

僕が何故高天原に誘ったのか天照様にそう言うとおつあんも天照様に噛み付くよう
に聞いたでした。

『先ほども言いしましたが、本心で私の罪滅ぼしで一誠君に高天原に来ませんかと言つたのです。』

「分かりました。」

〔主?!?〕

「八つあん、天照様は本当に本心で僕を高天原に来て欲しいと言うのは天照様の目を見て本当の事つて分かったからさ高天原に行くよ。」

〔ハァー、主が決めた事だ。儂はそれに従うまでだしかしだ、天照もし主に不利な事をしてみせろその時は……………〕

『承知していますよ、大蛇。その様な事が起きたら私は命を絶ちましょう』

天照様は、そう僕達にそう言つて天照様に付き従つて高天原に僕達は向かった。